

資 料

仙台大学バスケットボール・ワークショップについて
—第19回仙台大学バスケットボール・ワークショップの事例研究—

葛西 太勝, 児玉 善廣

About the Sendai University basketball workshop
—A case study of the 19th Sendai university basketball workshop—
KASAI Hirokatsu, KODAMA Yoshihiro

Sendai University Basketball Club holds Basketball Workshop every spring, in which many high school basketball terms participate.

This paper studies why the high school terms participate in the workshop and how they evaluate it. For this purpose, we used a questionnaire to the terms which participated in the 19th Workshop, the results of which were as follows:

- 1) Almost all terms had the intention of improving their players' skills. Some terms aimed at training their coaches as well.
- 2) The workshop was evaluated highly in that it was managed by the university students.
- 3) High school terms thought the Workshop highly reliable, and expected its future important role.

Key Words : basketball, workshop, coach

I. はじめに

1. 仙台大学バスケットボール・ワークショップについて

「仙台大学バスケットボール・ワークショップ（以下WSとする）」は、現在、東日本を中心とした高校生を集め、約1週間にわたり主に試合を中心とした各種イベントを企画し、運営を行う大会である。WSは、企画から運営のほとんどを仙台大学学友会男女バスケットボール部の学生（以下本部学生とする）で行われ、学生の実践的研修を兼ねた大会である。

第1回大会は、1989年に「柴田バスケットボー

ル・ワークショップ」という名称で開催された。当初は男子のみの開催であったが、その後、1993年の第5回大会より男女の開催となった。1996年の第6回大会から名称を、「仙台大学バスケットボール・ワークショップ」と変更している。第1回大会では13校の参加であったが、現在では男女合わせて80校強参加するという大規模な大会となっている。また、大会を通してスポーツ競技の持つ多様性とその付加価値を見出すための試みとして、各種スポーツイベントの企画を組み込んでいる。（表1）

第19回を迎えた2007年WSは、仙台大学アスレティックトレーナールーム（以下ATルー

ム)と本格的に共同企画を実施し、AT ルームの有志の教員・学生の協力のもとに、テーピングのサービスやアイシングのサービスなどを行うトレーナーブースを各会場に設置し、充実が図られた。同時にセミナーを開催し、指導者や、マネージャー等のスタッフを対象に障害予防やケアの知識を深めること、しいてはチームの競技力向上に貢献する目的で行われた。

さらに、女子バスケットボール部の栄養指導を行っている栄養サポート研究会からも「水分補給に関すること」というテーマでポスターを作製し、各会場に掲示した。このようにWSでは本部学生以外でも関わりを持つことができ、他の学生にとっても実践的な研修の場となっている。

表1 WSの主なあゆみ

西暦	名 称	参加校数	主なイベント
1989年	第1回 柴田バスケットボール・ワークショップ	男子：13校	
1990年	第2回 柴田バスケットボール・ワークショップ	男子：14校	
1991年	第3回 柴田バスケットボール・ワークショップ	男子：24校	コンディショニング・クリニック開催
1992年	第4回 柴田バスケットボール・ワークショップ	男子：25校	コンディショニング・クリニック開催
1993年	第5回 柴田バスケットボール・ワークショップ	男子：24校 女子：13校	女子ワークショップ開始、コーチング・クリニック開催
1994年	第6回 仙台大学バスケットボール・ワークショップ	男子：27校 女子：15校	「仙台大学バスケットボール・ワークショップ」と名称を変更
1995年	第7回 仙台大学バスケットボール・ワークショップ	男子：40校 女子：22校	
1996年	第8回 仙台大学バスケットボール・ワークショップ	男子：48校 女子：29校	韓国高校チームを招待
1997年	第9回 仙台大学バスケットボール・ワークショップ	男子：32校 女子：31校	コーチング・クリニック開催
1998年	第10回 仙台大学バスケットボール・ワークショップ	男子：42校 女子：41校	コーチング・クリニック開催 コンディショニング・クリニック開催
1999年	第11回 仙台大学バスケットボール・ワークショップ	男子：41校 女子：36校	コンディショニング・クリニック開催
2000年	第12回 仙台大学バスケットボール・ワークショップ	男子：37校 女子：29校	コーチング・クリニック開催、NSCAA（小規模大学体育協会）チーム招待
2001年	第13回 仙台大学バスケットボール・ワークショップ	男子：37校 女子：34校	
2002年	第14回 仙台大学バスケットボール・ワークショップ	男子：44校 女子：44校	車椅子バスケットボール開催
2003年	第15回 仙台大学バスケットボール・ワークショップ	男子：42校 女子：46校	セレモニー開催
2004年	第16回 仙台大学バスケットボール・ワークショップ	男子：40校 女子：39校	
2005年	第17回 仙台大学バスケットボール・ワークショップ	男子：39校 女子：37校	
2006年	第18回 仙台大学バスケットボール・ワークショップ	男子：46校 女子：39校	コーチング・クリニック開催
2007年	第19回 仙台大学バスケットボール・ワークショップ	男子：46校 女子：42校	AT ルームによるブースの設置、栄養サポート研究会によるポスター掲示

2. 研究目的

本研究は、第19回 WS において、参加している高校の指導者が WS についてどのような意識を持って参加しているのか、また、どのような評価をしているのかを、従来のコーチングに関する文献的資料¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁸⁾⁹⁾を基に検討を行うことで、その現状を明らかにすることであり、今後の WS の運営やイベントの充実を図るための資料を得ることを目的とする。

3. 第19回仙台大学バスケットボール・ワークショップについて

1) 開催時期：

男子期間2007年3月23日(金)～26日(月)

女子期間2007年3月26日(月)～29日(木)

2) 会場：仙台大学第一・第二体育館，角田市総合体育館，白石文化体育活動センター，大河原町総合体育館

3) 出場校数：男子チーム46校，女子チーム42校 合計88校

チーム42校の高校指導者88名。

有効回答数は男子チーム30校，女子チーム24校，合計54校（61.3%）であった。

2) 方法

質問紙調査を実施した。具体的には、参加初日の受付の際に、各高校指導者に質問紙を配布し、最終日に回収した。

3) 質問内容

質問紙の作成には研究者と運営に携わる学生役員によって作成された。質問の内容は、WS の参加目的、成果、評価を問える内容とした。（表2）

①参加目的

②成果（良くなった点，悪くなった点）

③運営について（今後の WS に期待するものを含む）

④栄養サポートグループによる情報開示について

⑤ AT ルームによるセミナーについて

①については、それぞれの項目に該当する回答の全てに回答してもらおうようにし、②、③については自由記述とした。④についてはポスターを閲覧したかの有無を回答してもらい、自由記述とした。⑤についても、セミナーの参加の有無を回答してもらい、自由記述とした。

II. 研究方法

1) 対象

WS に参加した男子チーム46校，女子

表2 質問紙内容

1. ワークショップに参加した目的を教えてください。該当するものすべてに○をつけて下さい。 ア. 競技力向上のため イ. 精神面強化のため ウ. チーム作りのため エ. 試合経験を積むため オ. チームの現状を知るため カ. 他チームから学ぶため キ. 監督間で交流を図るため ク. その他
2. ワークショップに参加して、チームとして良くなった点や悪くなった点はありますか。
3. 主催者側（学生）の運営について、気づいた点・改善点などをお聞かせ下さい。また、これからのワークショップに期待するものはなんですか。
4. 運動栄養学科の栄養サポートによる情報開示について 各会場に設置している掲示板を見ましたか？ 見た・見ていない 仙台大学女子バスケットボール部は、競技力向上のため栄養サポート研究会による栄養面（食生活管理、体重、体脂肪の管理）のサポートを受けています。今回、多くの高校生が参加するという事で、この機会に高校生の競技力向上に役立てて頂きたいという目的で、掲示板での情報掲示板をしました。この試みにつきまして、皆様のご意見等をお聞かせ下さい。
5. AT ルームによるセミナー開催について セミナーに参加しましたか？ 参加した・参加していない 今回、指導者・マネージャーに障害予防やケアの知識を身につけてもらい、チームの競技力向上に結び付けてもらうことを目的に、セミナーを開催しました。この試みにつきまして、皆様のご意見をお聞かせ下さい。

4) 集計方法

①については、回答を項目別と指導暦別に単純集計した。②, ③については自由記述内容を全て一覧にし、研究者同士でその傾向を検討した。④, ⑤については単純集計した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 参加目的について

ここでは指導者がクラブ活動の現場において指導目的の要因を、「強化」、「育成」、「情報・コミュニケーション」の3種類のカテゴリーに分け、計7項目について傾向を調査した。

指導者の指導暦は、10年未満が22名(男子チーム12名, 女子チーム10名), 10年以上~20年未満が13名(男子チーム8名, 女子チーム5名), 20年以上が19名(男子チーム10名, 女子チーム

9名)であった。

1) 項目数とチーム数

表3は、回答項目数とチーム数を表したものである。8項目全てに回答したチームは、3チーム(男子1チーム, 女子2チーム), 7項目に回答したのが2チーム(男子1チーム, 女子1チーム), 6項目に回答したのが10チーム(男子4チーム, 女子6チーム), 5項目に回答したのが10チーム(男子8チーム, 女子2チーム), 4項目に回答したのが12チーム(男子8チーム, 女子4チーム), 3項目に回答したのが8チーム(男子4チーム, 女子4チーム), 2項目に回答したのが7チーム(男子3チーム, 女子4チーム), 1項目に回答したのが2チーム(男子1チーム, 女子1チーム)であった。

表3 回答項目数と指導暦

	回答者数			指導暦(年)	
	男子	女子	合計(名)	男子	女子
8項目	1	2	3	11	25.22
7項目	1	1	2	25	12
6項目	4	6	10	30.16.14.10	35.30.16.6.4.1
5項目	8	2	10	33.20.13.6.5.4.4.1	6.4
4項目	8	4	12	34.22.20.7.7.7.4.2	40.20.6.2
3項目	4	4	8	40.15.4.3	34.14.7.3
2項目	3	4	7	21.26.10	22.20.15
1項目	1	1	2	12	13
合計(名)	30	24	54		

2) 項目別における回答数

図1は、「WSに参加した目的を教えてください」の質問項目に対する集計結果を示したものである(複数回答可)。項目中、最も回答が多かったのが「ア. 競技力向上のため」

(45名)であり、参加している殆どのチームが競技力の向上を目指していることがうかがえる。次に多かったのが「エ. 試合経験を積むため」(40名)であり、順に「ウ. チーム作りのため」で34名、次が「カ. 他チームから学

ぶため」で30名であった。各チームにはそれぞれの目標はあるにせよ、少なくとも「競技力向上を目指し」、「試合経験を積み」、「チーム作り」をおこなうという、強化における一連の流れが掴みとれる。これらの結果は、どのチームの指導者も、WSに対して競技力向上のために春休みという、まとまった期間を利用し、多くの試合経験を積み、選手の育成、

並びにチームの強化を図ろうとする意図がうかがえる。

最も回答が少なかった項目は、「オ. チームの現状を知るため」と「キ. 監督間の交流を図るため」で共に26名であった。強化を目指す反面、対外的な交流やコミュニケーション作りなどの社交性について消極的な一面がうかがえた。

WSの参加目的

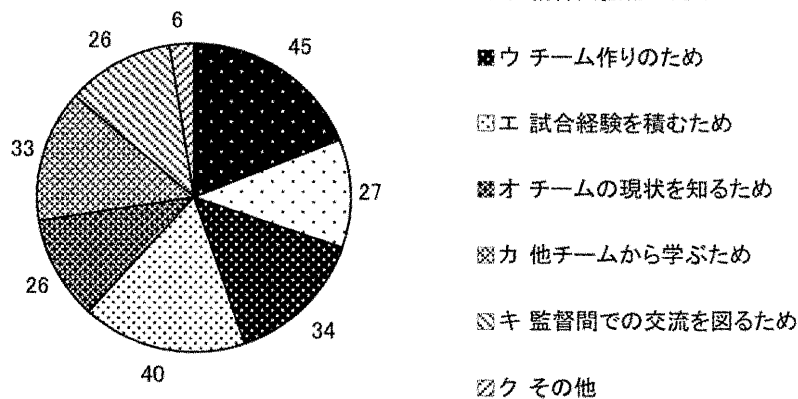


図1 WSの参加目的 (回答数:名)

3) 指導暦別にみた項目の回答率

図2は、指導暦別に項目の回答率を表したものである。指導暦は、20年以上を熟年グループ、指導暦10年以上～20年未満を中堅グループ、10年未満を若手グループとした。回答率は、各指導暦グループの指導者総数で項目の回答数を割って、グループごとの回答数の割合を表したものである。

熟年グループでは、「ア. 競技力向上のため」が項目の中で最も多く、16名：84.2%と高い回答率を示した。次に「ウ. チーム作りのため」で14名：73.3%，そして、「カ. 他チームから学ぶため」が13名：68.4%，さらには「エ. 試合経験を積むため」が12名：63.3%の順であった。

一方、項目中最も低い値と回答率を示した

のが「イ. 精神面強化のため」(7名：36.8%)で、他のグループと逆の傾向がみられた。以上の結果から、キャリアの多い指導者は、他チームから学び取る事、選手により多くの経験を積ませ、強化を図ろうとする無駄のない計画性がくみとれる。

10年以上～20年未満の中堅グループでは、3つのグループ中、回答数では最も少ないグループであったが、回答率では殆どの項目で平均的に高い値を示しており、特に「ア. 競技力向上のため」、「エ. 試合経験を積むため」で共に10名：76.9%であった。次に多かったのが、「オ. チームの現状を知るため」で8名：61.5%であり、さらに「イ. 精神面強化のため」、「ウ. チーム作りのため」、「カ. 他チームから学ぶため」は共に7名：53.8%で

あった。これは年齢及び、指導暦等を考慮に入れると、総合的な面で、経験的積み重ねが、コーチング及び指導法に関し多様性を備えていること、また、指導者の立場で、ある程度の競技実績を踏まえ、指導法が確立されてきている時期でもあることを示している。

10年未満の若手グループでは、アンケート回答数が54名中22名と最も多かった。特に回答率の高かった項目は、「ア. 競技力向上のため」で19名：86.4%であり、次に多かったのが「エ. 試合経験を積むため」18名：81.1%であった。WSに参加することで他チームとの試合を多く経験させ、競技力向上を図ろうとする目標がはっきりと捉えられる。しかし、一方で特に低い回答率を示したのは、「キ. 監督間の交流を図る」(9名：40.9%)と、「オ. チームの現状を知るため」(8名：36.5%)の2項目であった。これは、指導的経験が浅いため、チームの競技レベルも含め、全体的に綿密な指導計画の確立までは行き届かず、チーム強化と経験のみに目標が絞られていて、いわゆる強化のための試行錯誤の状態であることがうかがえる。また、他の指導者との情報交換やコミュニケーションなどの社交

性、ネットワーク作りまでは確立されていない状況が読みとれる。この指摘は、「キ. 監督間の交流を図る」(9名：40.9%)に関して比較すると、3つの指導暦グループの中で、若手グループが最も低い回答率を示していることで、さらに整合性がでている。

以上の結果をまとめると、WSに参加している殆どのチームは、チームの競技力向上を目指していることが分かった。その中で、各グループでは強化の仕方がそれぞれ異なる傾向を示した。

熟年グループでは、他チームとの試合や見学で学び取るというチーム作りをしており、さらに指導者も含めた他チームとの交流により試合での経験のみならず、選手間との多角的なアプローチの技量⁷⁾を兼ね備えており、色々な面で情報を集め、学び取ろうとする意図が強く表れている。

中堅グループでは、キャリアと年齢、共にバランスの取れている時期を反映し、参加を通して色々な側面から、プレイヤー個人はもちろん、指導者自らも多角的にチーム強化を図ろうとしていることがうかがえる。

若手グループでは、試合経験を積みながら、

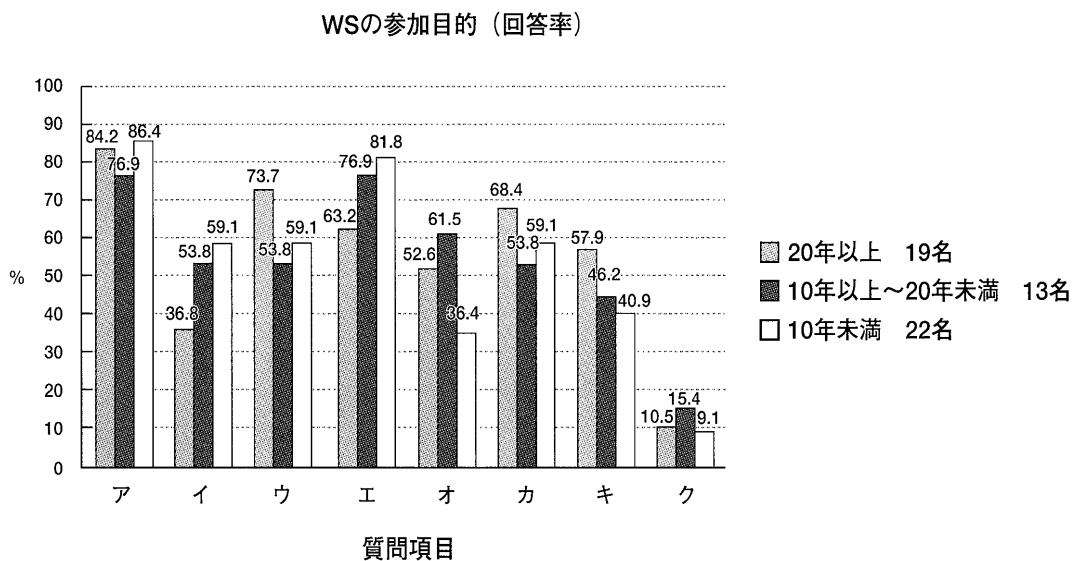


図2 WSの参加目的 (指導暦別と回答率)

競技力向上を目指そうという目的で参加している反面、チーム把握および、他チームとの交流や、コミュニケーション等に消極的であることがうかがえる。よって現状把握や評価、練習計画及び、情動的戦略等の総合的な指導計画を確立するまでに至っていないことが指摘された。

2. WSに参加して良くなった点、悪くなった点について

1) 良くなった点

良くなった点については経験を通し試合慣れや、チームワークの良さを指摘する回答が多く、競技力や指導層のあるチームになるにつれて、その内容もオフェンスとディフェンスごとに確認されており、具体的なプレーの中身にまで及んでいる傾向にあった。また、競技力が充分でないチームについては、特に経験によって精神的な弱さが発見できたといった内容や、体力がついた、身体的側面で速い展開ができるようになったなどの基本的要素の向上を指摘する内容が多かった。これらのことは、競技レベルによってその指導者らが、チームの把握をしながら計画的にチーム育成を行おうとしている姿勢が、一つの意見の差となって表れた結果といえよう。

2) 悪くなった点

参加によってマイナスになったという指摘はなかった。今後の課題の発見として捉えて記述しているチームが多く、むしろ一つのメリットと考えられるケースが多かった。詳細なものはあったにせよ、参加する当初のチームの目的等を考慮に入れれば、少なからずWSの参加で得られる成果が大きいと受け取られていると判断しても良いであろう。

3. 運営に対する評価とこれからのWSに期待するもの

大会に対する価値観や評価の高さは、過去18

年という長期間に渡り継続してきたという大会に対する一つの信頼性を反映しているものと考ええる。それによって、限られている期間の中での「集団生活」、「大会運営」、「競技」という研修（教育）と強化と交流（コミュニケーション）面を一挙に体験できる密度の濃いイベントとして受け取られている点であろう。その点を強く表しているのが、「大学生の運営活動の姿を高校生に学ばせたい」という回答であった。これらの回答は、主催者側にとって何よりもやりがいのある励ましの言葉であり、ただ単に、参加チームが競技力に結びつく専門技術の体得を目的とすることなく、生徒に対するクラブ活動全般に渡る教育的な目標を掲げていることに他ならない。

参加の手続きに際し、試合スケジュールの事前の連絡の徹底、組合せの変更など対応でのトラブルが指摘されたが、参加チーム数、施設等の分散、連絡器具の不備や連絡手段の統一が大きな原因であり、その点で課題が残った事も事実であった。今後は、連絡についてのマニュアルの作成や器具の充実を図ること等があげられた。

審判についてのジャッジ（判定）の不满に関する意見も見逃すことができなかった点の一つである。この点については毎年必ずあげられる大事な問題である。数年前より対策として事前に審判講習会を開き、お互いの共通した基準を作ってきたが、まだその点については、個人的判断のミスを含め経験不足による原因がポイントとなっているであろう。

この大会での参加チームについては、年を重ねることにより、卒業生の率いるチームが増えていることも見逃せない事実としてあげられよう。その中で、過去18年間でこのWSおよび競技活動での活躍を期待している。特に「教員や指導者として、はばたいてもらいたい」とする、高いレベルでの評価をしていただくことが多く、WSにおけるマナー、対応力を含めてかなり厳しい意見もあった。この点については一

つの叱咤激励として受けとめている。

4. 運動栄養学科の栄養サポート研究会による情報開示について

今回のWSでは初めての試みとして、栄養サポートによる情報開示を行った。具体的には、「水分補給」に関することでポスターを作製し、各会場に掲示した。

「各会場に設置している掲示板を見ましたか」という問いに対して、「見た」と回答したのが35名、「見ていない」と回答したのが19名であった。自由記述には、「非常に良いことだと思う」、「参考になる」といった肯定的な記述が多く見受けられた。しかし、「掲示する場所をもっと分かりやすくしてほしい」、「もっと宣伝してほしい」といった設置場所についての記述も多く見受けられた。多くの指導者が掲示板を見ており、それに対する評価も高いものを示しているが、設置場所が不明確であることや、宣伝が足りなかったという課題があげられた。この改善点として、事前に施設、設備の確認、人の流れなどを把握する必要があり、プログラムや受付の際に、イベントについての宣伝をするといった工夫が必要である。

5. ATルームによるセミナーについて

ATルームが開催したセミナーについて、「参加した」と回答したのが1名、「参加していない」と回答したのが53名であった。自由記述には、「時間が合えば参加したかった」といった記述が多く見受けられ、また、「すばらしいことだと思う」といった記述もあった。

このことから、セミナーに関しては興味や関心があるものの、試合時間と開催時間が合わないということで、参加できないという現状が明らかになった。この点の改善点については、開催方法や、開催時期、試合時間との関係を調整する必要がある。

IV. ま と め

本部学生の実践的研修を兼ねて、東日本を中心とした高校生を集めて行われる「仙台大学バスケットボール・ワークショップ」は、今回で19回目を迎えた。これまで試合を中心として、様々な各種イベントが企画、運営されてきた。

本研究は、第19回WSにおいて、参加している高校の指導者がWSについてどのような意識を持って参加しているのか、また、どのような評価をしているのかを従来の文献的資料を基に検討をしながら、その現状を明らかにし、今後のWSの運営やイベントの充実を図るための資料として得ることを目的として、参加チームの指導者に対して質問紙調査を行った。その結果としては次のような点が指摘された。

- ①参加チームの殆どがWSに対し競技力の向上を目的として、チームのテーマを考え、多角的に選手の育成及び、指導者の研修を試みていることがわかった。
- ②WSにおける大学生の企画、運営、試合などの活動を参考にし、チームに活かそうとしている点や、大学チームのイベントとして高く評価されていることがうかがわれた。
- ③質問紙調査の指摘や意見は全ての項目において、より充実を図ってもらうための協力的なアドバイスならびに教育的配慮のある内容が多く、WSの将来性に対して高い評価を認めることが出来た。

参考文献

- 1) コーチ学研究委員会 (1994) コーチ学入門. 日本スポーツ方法学会コーチ学研究委員会.
- 2) 勝田隆 (2003) 知的コーチングのすすめ. (株)大修館書店
- 3) 勝田隆, 栗木一博, 高橋弘彦, 小西裕之, 鈴木省三, 長橋雅人, 永田秀隆 (2006) ジュニア期の競技者に対する競技力向上のための講習会プログラム開発に関する研究. スポーツ方法学研究19: pp57-65.
- 4) 水谷豊 (2001) コーチ学の基礎に関する補遺的

仙台大学バスケットボール・ワークショップについて

- 一考察. スポーツ方法学研究14-1: pp171-180.
- 5) 仙台大学学友会バスケットボール部 (1989～1993) 第1～5回柴田バスケットボール・ワークショッププログラム.
- 6) 仙台大学学友会バスケットボール部 (1994～2007) 第6～19回仙台大学バスケットボール・ワークショッププログラム.
- 7) 鈴木義幸 (2000) コーチングが人を活かす. (株) ディスカバー21. pp108-121.
- 8) (財) 日本オリンピック委員会選手強化本部 (2001) 指導者の義務と責任. (財) 日本オリンピック委員会強化事業部.
- 9) (財) 日本体育協会 (2005) 公認スポーツ指導者養成テキスト共通科目Ⅲ.